

中編小説

女教師のうた

キム・ヨングン
訳ピョン・ジェス

朝鮮青年社



中編小説

女教師のうた

キム・ヨングン

訳ピョン・ジェス

朝鮮青年社

お 願 い

あなたはこの本を読まれて、どんな感想をもたれたでしょうか。

「読後の感想」を左記宛にお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

この次にはどんな本をお読みになりたいと思いますか。そのほか、お気づきの点がありましたらお教えてください。お手紙には、あなたの職業や年令をお書きそ

東京都文京区白山四―三三―一四

(朝鮮出版会館内)

朝 鮮 青 年 社

中編小説 女教師のうた

1975年2月10日

第1刷発行

定価 980 円

著 者

キム・ヨングン

翻 訳

卞 宰 洙

発行所

朝 鮮 青 年 社

東京都文京区白山4の33の14

(朝鮮出版会館内)

電話 東京 (813) 2 2 9 1

振替 口座 (東京) 8 3 6 2 8

落丁本・乱丁本は本社でおとりかえいたします。

序にかえて

― 推薦のことば ―

私は一九七二年の秋、朝鮮民主主義人民共和国を訪問した際いくつかの学校を訪れ、教職員と子どもたちから熱烈な歓迎をうけた。その際、希望にあふれた子どもたちの明るい笑顔から、この国の教育が、キム・イルソン主席の教えにそって、すばらしい建設途上にあることを私なりに確信することができた。

この小説は、解放後の革命闘争のなかでの学校教育が、祖国建設のためのたたかいとして、全人民の力で推進されてきた姿が、具体的に描写されている。

ヒロインである女教師ハン・ジェスギの苦闘の歩みは、とくに感動的で胸をうつものがある。革命途上の悪条件をのりこえ、アメリカ帝国主義の侵略に屈することのない美しくたくましい教師としての生き方は、日本の教師にも多くの示唆と教訓とを与えてくれることに違いない。クムヒをはじめこの国の未来をになう多くの子どもたちも登場し、小説としての構成もしっかりしており、多くの教師学生にすすめたい記録的小説である。

日本教職員組合中央執行委員長

植 枝 元 文

目次

第一章	最初の春……………	1
第二章	チョンガブ洞……………	15
第三章	りんごの木……………	60
第四章	新しい出発……………	82
第五章	雪の道……………	124
第六章	こだま……………	184
第七章	陽光……………	233
第八章	鐘の音……………	283
現代チヨソン文学の流れ……………		309

第一章 最初の春

1

春がきた。戦争後はじめて迎える春だ。四季の推移が平地よりも一か月は遅いといわれるこの高山地帯の小さな郡庁所在地にも、春は暖かい日ざしをなげかけた。

数日前までにこった雪どけの水に氷を浮かべて流れていた小川も、今では秋の空のように澄みきってせせらぎの音をたてている。川岸にはいつしか柳が青く芽をふき、鉄道がめぐる郡庁の北の日あたりのよい山麓にはつつじがわずかにつぼみをひらき、広葉樹の新芽の緑も濃くなった。

万物をよみがえらせ、自然をはぐくむ春。とくに、きびしい戦後の廃墟の中から復旧と建設の槌の音、シャベルの音ひびくこの国におとずれたこの春は、戦争に勝利した人々に大きな希望と抱負をもたらした。

一日に一軒ずつの家を建てたいと願っていた建設者たちは、やわらかくなった地面に心ゆくまでつるはしを打ちこみ、スコップを突き立てることだろう。戦争中、月夜と雨の日を選んで種をまき田植えをした農民たちも、今は自由に田畑に出て行くことだろう。

都市と工場、建設場へと配置されて行く青年たち、除隊軍人たち、かれらはどんなに希望にあふれていることか！ 半洞窟の教室や仮校舎で学びながら、建設されて行く新しい学校を眺める生徒たちの胸は、またどんなに希望にあふれていることか！

ハン・ジェスギ教師にも、この春のように夢が多かった。

間もなく夫が前線から帰ってくる。夫が帰ってきたらこの郡を出ることになるだろう。

数日前もある女教師が除隊した夫とともに山間の農村に転動した。その女教師は以前からそういう所を望んでいたのだろう、新しい抱負をいだいていそいそと行った。そのときジェスギは、自分もそうなるのだろうかといひどく不安になった。

（あんな山奥の村に行つてなんの生きがいがあるのかしら。私だったら行かないわ…）

ジェスギはこんなことを考え、自分の若い夢を育ててきた故郷の都市を思い出すのであった。

ジェスギの故郷はこの片田舎ではなく、東部の工業都市ハムフン（咸興）市であった。彼女の父は小学校の教師で、新しい世代の教育にたずさわることが生涯の義務であり、しあわせだと考えている人であった。

ジェスギは子煩悩な両親の愛につつまれて解放前に小学校を終え、解放後にハムフンの師範専門学校を卒業して、この山間の郡に人民学校の教師として赴任した。ハムフンのような都会で育った彼女にとってこの任地は不満ではあったが、クラスを担任し父兄とも親しくなるにつれて、いつしか小さな僻村になじむようになった。ジェスギは郡人民委員会農業部の畜産指導員であるキム・キョンチョルと結婚した。

二人の夢多い新婚生活ははじまってすぐ、アメリカ帝国主義によって戦争が引き起こされた。夫は志願して前線に行き、ジェスギは新婚生活をはじめたばかりの新しい家に一人とり残された。しかし彼女は、前線から夫が帰る勝利の日を待ちながら熱心に子どもたちを教えた。この頃、ハムフン市を無差別爆撃したアメリカ侵略軍の空襲によって、ジェスギの父は犠牲となった。

当時、工機工場の技師であった彼女の兄も志願して人民軍に入隊した。

ジェスギの母と兄嫁は、やっとの思いで持ち出したわずかな身のまわり品だけで、彼女のところへ身を寄せた。

後退の時期（一九五〇年九月からおよそ一か月の間、チョソン人民軍が戦略的後退をした一時期——訳注）が終り、人民軍によってハムフン市が解放されると、兄嫁は兄の工場で働くといって帰って行った。

ジェスギの母は、連日爆撃にさらされているハムフンに帰る考えはなかった。

彼女は戦争が終わってから故郷ハムフンに帰るつもりで、一人娘の家に残った。

アメリカ侵略軍の盲爆によってこの郡庁所在地も廃墟と化したのが、ジェスギは、同僚の教師たちと同じように、住居をかわり、学校を移動させながら教鞭をとりつづけた。

前線の夫からはたびたび感動的な便りがとどいた。二年前の秋には、胸に勲章をつけた軍服姿の写真とともに、はげしい戦闘の模様をしたためたながい手紙がとどいた。そのときジェスギは、手に汗をにぎるような思いでその手紙を読み、英雄的にたたかう夫をたのもしく思い浮かべたのだった。

その夫から、停戦後はいじめて迎えるこの春とともに、数日中に除隊されるだろうという便りがとどいたのだった。こうした期待と、復旧建設の息吹きにつつまれて、ジェスギは学年末試験の準備をす

すめていた。

2

きのうも、ジェスギは学年末試験にそなえて生徒たちの補習授業をして、夜もかなり遅くなってから帰宅した。家に帰ってから翌日の教案を準備して、明け方近くになってから床についたが、

「ジェスギ、もう時間だよ、はやく起きなさい」

という、母のとがめるような声に、あわててとび起きた。

急いで顔を洗い、朝食もほとんど手をつけずに家を出た。停戦直後に建てた仮り住まいの家から学校までは、わずか百メートルたらずの近さだった。朝の春風にジェスギのおくれ髪がさわやかになびく。彼女は郡庁前の通りをいとおしげに眺めながら歩いて行った。

昨年の夏、停戦当時までは文字どおりの灰燼であつたのが、今では郡の仮り庁舎や応急の住宅が百余戸も並び、仮り校舎も建って郡庁通りのかっこうがついていた。

仮り校舎の向う側で建築中の学校は、きのう一晩だけでもブロックの壁がかなり高くなっていた。もうすぐあの新校舎でガラス窓や床をきれいにみがき、生徒たちに祖国の未来をになう使命について教えるのかと思うと胸がおどった。

夫は戦前この郡の人民委員会農業部の畜産指導員だったので、帰郷したらまたその仕事をつづけるか、郡の機関で働くことになるだろう。そうになったら、息子といっしょに暮すことが夢である母は望

みどりハムフンに送り帰り、夫と二人だけで新しい生活をきずくことになるだろう。

「ジェスギ先生、いっしょに行きましょう」

と、後ろからソンヒが声をかけてジェスギを現実にもどした。

「はやくいらっしゃい。ソンヒ先生、あれをこらんになって、新校舎の壁がきのうよりも高くなつたでしょう」

と、ジェスギは感嘆するように言った。

「そうね。私、あの新校舎で生徒たちを教えるのかと思うと、もう楽しくって……」

「私もそうよ」

ジェスギもその日が待ちどおしくてならなかった。

始業の鐘が鳴り教室に入ると、ジェスギはいつものようにすべてを忘れて授業だけに情熱をそそいだ。学年末の試験を目前にした教師はだれでもそうであつたが、とくにジェスギは自分のクラスの実力を向上させようという一念に燃えて、教室では授業以外のことはなにも考えないのであつた。

一日の授業を終え昼食をすませて、職員室にもどると、さすがに疲れが出てのどがヒリヒリした。

彼女は午後の日ざしを受けた机をぼんやり見つめて座っていたが、水さしをとってのどをうるおし、明日の教案の作成にとりかかった。

教案を書き終えたとき、南行きの列車が汽笛を鳴らしながら山麓を曲った。その列車が山麓にかくれて見えなくなると、こんどは北行きの列車がくるはずだつた。彼女はふと、つぎの列車に夫が乗っているのではないかと思つた。彼女は無意識のうちに席を立てて駅の方を見おろしていた。

すると彼女の心を見すかすように、右隣りの机に座っていたソンヒが笑いながら声をかけた。

「ジェスギ先生、なにを考えてらっしゃるの」

ジェスギは思わず顔を赤らめた。

「まるで夢見る乙女ね。ご主人とお二人でピョンヤン（平壤）へ行かないともかぎらないわよね、ホホホ」

左隣りの同僚もからかうように言った。

「まあ、だれがそんなことを……」

ジェスギはあわてて打ち消したものの、心の片すみにそんな考えがないでもなかった。

除隊してフナム（興南）の工機械工場に配置された兄のように、夫もハムフンに行くようなことになればどんなにすばらしいだろう……。

ジェスギの眼前にはいつしか、夫と二人でパンリョン山に登って海を眺めたり、ソンチョン（成川）江の岸辺を散歩したりする姿が浮かんできた。新築の高層アパートに住み、朝、夫を勤めに送り出し自分は近くの学校へ出勤する……。戦場で英雄的にたたかった夫は、きっと新しい職場でもりっぱな仕事をするにちがいない……。

こんな空想にふけて窓の外を眺めていたジェスギは、運動場で元気に遊んでいる生徒たちを見て、今さらのようにいとおしさがこみあげてくるのだった。

（そうじゃない、夫はきっとここに残るわ。そして私は、あの子たちを新しい校舎で教えることになるのだわ）

ジェスギはこんなことを考えながら、運動場で遊ぶ生徒たちを見ていた。

このとき、職員室のドアがそっと開いて、ジェスギの母が顔だけ出して彼女を呼んだ。

ジェスギは母のようすから、直感的になにかうれしいことがあったにちがいないと思った。

「帰ってきたよ」

母はにこにこ笑いながら、だれがとも言わないで、ジェスギの耳に口をあてるようにして小声で言った。

「だれが？」

ジェスギは胸をどきどきさせながら聞き返した。

「だれって、おまえ、あの人に決ってるじゃないか」

「まあ、何時の汽車できたのかしら」

「それがおまえ、北行きの列車だとばかり思ってたら、南行きでひょっこり帰ってくるじゃないか、あんまり突然なもので、びっくりしたよ……」

「お母さん、先に行つて。あとからすぐ行くわ」

ジェスギは校長にわけを話して学校を出た。

（前線から帰る人はみんな南からくるものと決めていたんだわ、私ってばかね……）

家の前まできてジェスギは胸の動悸（どうき）をしずめようと、しばらく立ちどまった。母と夫の話し声が聞えてくる。やわらかいがよくとおるその声は、彼女の胸に力強くひびいてきた。

彼女はしばらくそのまま立っていたが、やがて静かに戸を開けて中に入った。彼女の顔には、勝利

をおさめて帰ってきた夫を迎える喜びがあふれていた。彼女はと言ったらいいいのかわからなかった。

「北行きの列車でお帰りだとばかり思ったものですから…。お迎えにもあがらないで…」
ジェスギは母の横に座って顔を赤らめた。

「迎えに出るなんておおげさな…」

キョン Chol はにっこり笑った。

ジェスギはやっと、夫の姿をはっきり見ることができた。肩章をとり革帯をはずしただけの軍服姿で、入隊前にくらべてさらにたくましくなり、それでいて、どこか洗練されたように思われた。

キョン Chol も久しぶりに会った妻を上げしげと見つめた。

白い赤衫チヨクサム（ひとえの上衣—訳注）に黒の裳チツ（スカート—訳注）をはき、黒髪を後ろにたばねて桃のように丸く結んだ妻の姿は、戦前の子どもぼさがなくなり、いかにも新妻らしい印象を与えた。ながいまつ毛の奥の湖水のように静かな瞳や、笑うたびにできるえくぼは、乙女の時代と少しもかわらない。

「戦場では苦勞なさったでしょうね」

ジェスギがぎごちない沈黙を破ろうと、意識してことばをかけた。

手紙では自然だったことばがどうしてこんなにわざとらしいのか、自分でもわからなかった。

「ぼくは一人だけの身でなにも苦勞なんかなかったが、きみの方こそお母さんの世話をしながら、爆撃の中で子どもたちを教えたんだ、たいへんだったろう」

こう言うキョン Chol のことばも、どこことなく不自然だった。

娘とむこのきごちない会話を聞きながら座っていたジェスギの母は、夕食のしたくをするからと台所に立って行った。

3

つもりつもった話をかわす楽しいはずの会話は、ながくつづかなかった。

キョンチオルが嘆願するようにして自分の故郷のチョンガブ洞（郡庁のあるここから十里も奥に入った僻村）で働くことを志願したと聞いて、ジェスギの顔には急に失望の色が浮かんた。

キョンチオルは妻を信じていたので、チョンガブ洞のような僻村に行くのがいやで彼女が顔を曇らせたとは思わなかった。こんなにも愛している妻が、自分の希望を理解できないなどとは考えてもみなかった。

「どうしたんだ、ここを離れられない事情でもあるのかい？」

キョンチオルは、自分が妻に喜びと幸福のかわりに禍いをもたらしたような気がして、すまなそうにこうたずねた。

ジェスギは夫のそのことばに、自分の考えを率直に言うことができなかった。激烈な戦闘でアメリカ侵略軍を撃滅した戦士、つまり、ジェスギとは比較にならないほど大切にされるべき人が嘆願して選んだ道なのだ、自分のわがままでどうして引きとめることができよう……。

彼女は夫の問いには答えず、逆にこうたずねてみた。

「あの、郡の党組織に提起してここに配置されるようにはなりませんの？」

「……」

キョンチヨルは妻の真意を知ろうとしてか、しばらく無言でそのかけをおびた顔を見つめた。

「そのつもりならなにも故郷にもどるようなことはしないよ。はじめから道庁（道は日本の県にあたる行政単位―訳注）の所在地に配置してほしいと頼んでいるさ」

「どうしても故郷にもどらなければならぬんですの？」

ジェスギはまだあきらめきれないで、たしかめるようにたずねた。

「そうだよ」

キョンチヨルは故郷を思い浮かべているのか、目を細くしてことばをつづけた。

かれの故郷は、昔からとうもろこしを食べるのがやとで、トスレ（麻糸を煮てよった糸―訳注）の着物しか着られないような貧しい村であった。だがそこには、村中が白米のご飯と肉を食べて牛乳も飲めるようにするだけの牧草地があった。キョンチヨルはその牧草地帯に人民の牧場をつくらうという大きな抱負をいだいて、小学校を卒業してからずっと牧畜にかんする勉強をつづけてきた。前線でも畜産関係の書物を背囊（いしづ）に入れ、ひまさえあれば読みふけていた。村に試験的につくられた協同組合の管理委員長になった友人が、前線にいるキョンチヨルにたびたび手紙を書き送った。除隊したら故郷に帰って牧場の仕事をやってくれないか、と……。キョンチヨルは喜んで承諾し、近いうちに妻とともに行くから家をさがしておいてくれと、返事を出した。管理委員長からは、昔キョンチヨルが父母といっしょに住んでいた家があるからいつでも住めるという答えが返ってきた。

キョンチオルが故郷に帰ろうと決心した、今一つの別の理由があった。

それは、同じ小隊でたまたかい壮烈な最期をとげた同郷の「羊おじさん」の遺族、妻と幼いホンチオル、マンチオル兄弟のめんどろをみてやらなければならないという義務感であった。三十八才であったその兵士は、休息のときにはいつも故郷に牧場をつくって羊を飼ひ、子どもたちに羊の乳を飲ませ羊毛のチョゴリを着せるのが夢で、「羊おじさん」というあだ名で呼ばれていた。故郷の村に牧場をつくるという共通の希望が、キョンチオルとかれを親しくさせた。ところがその兵士は停戦を数か月前にして、肉迫戦で壮烈な最期を上げてしまった。

キョンチオルに抱かれて息を引きとる直前に、かれは、

「小隊長同志、故郷に帰ったら私の分まで働いて、りっぱな牧場をつくってください……」という最後のことを残したのだった……。

ここまで話したキョンチオルは、

「ぼく個人の希望もあるが、党では、農村を協同化して農民を思想的にめざめさせる戦線に立てと、ぼくたち除隊軍人に訴えている。それでぼくはまっすぐここへもどってきたのだ」

と、話をむすんだ。

ジェスギはなにも言えなかった。郡庁のあるここに残ってほしいと言うだけの勇気がなかった。そうかといって、黙って夫について行く気にもなれなかった。数か月の間故郷で仕事の手助けをして、またここへもどってくればいいのという考えしかなかった。夫の信念と理想を十分に理解することのできないジェスギとしては、夫があまりにも純真で一徹すぎると思われたが、それを口に出す勇気

はなかった。

「ぼくにここへ残れと言うが、なにか特別な理由でもあるのかい？」

夫がたずねた。

「私は……、私は教師をやめたくないんですの」

ジェスギは本心とはうらはらの答えをした。

「なんだ、そうだったのか、ハッハッハッ。つまらん心配をしたものだ。ぼくの故郷にも小さいが分校はあるよ」

キョン Chol は、いらぬことを心配したものだといわんばかりに、声をたてて笑った。その笑いはすべてが解決したということを意味する。ジェスギはあわててつぎのことばをさがした。

「じつは、それだけではないんです。ここには戦火の中で教えた生徒たちや親しい父兄もいますし……」

ジェスギは哀願するような声で言った。事実この瞬間、ジェスギは都会に住みたいという考えよりは、生徒たちへの愛情を強く感じていた。

「新しい任地でも生徒を愛することはできるんじゃないか」

夫のことばに、ジェスギはどきまぎして弁解するように言った。

「だけど、受け持ちの生徒たちはあと二か月で進級なんです。あの子たちを今ほかの先生にまかせるなんて、私、かわいそうで……」

彼女のこのことばは、あまりにももっともらしかった。